

医療現場と教育現場を経験して



茨城県立医療大学 放射線技術科学科

中島絵梨華

仕事編

1

Q 診療放射線技師を目指したきっかけ

A 私は高校時代に漠然と医療系の仕事に就きたいと考えていましたが、大学を選択する際の優先事項は自宅から通学できることと学費が高額でないことでした。そのため自宅近隣にある医療系の大学に希望を絞り、たまたま受験した年度で最も競争率が低い学科である放射線技術科学科に入学しました。そのため、お恥ずかしながら他の方のような元々どうしても診療放射線技師になりたくて、なったという感じでは正直ありません。しかし、いざ大学に入学し優秀な先生方から診療放射線技師になるための様々な基礎科目や専門科目を教わっていくうちに診療放射線技師の奥深さに興味を惹かれていきました。また臨床実習等で診療放射線技師が実際に病院でどのような役割を担っていて、どのように医療に貢献しているのかを先輩の診療放射線技師の方々に教えていただき、より本気で診療放射線技師になりたいと思うようになりました。

2

Q やりがいを感じる時

A 病院に勤務している際は、患者様から「ありがとう」と声をかけてもらったときに一番やりがいを感じています。さらに自分の満足のいく画像が自分のシミュレーション通りに撮影できたときも満足感があります。特に一般

撮影検査やMRI検査等は患者様に応じて撮像方法を工夫する必要がありますが、定められた時間の中で、なるべく患者様の負担が少なく、かつ診断に有用な画像を取得できたときは技師冥利に尽きるものです。

教育現場で仕事をしている際は、学生とコミュニケーションをうまく取れたときにやりがいを感じています。学生は正直ですからつまらない授業をしたり、うまく学習内容を説明できなかったりするとなかなか距離を縮めてくれません。しかし、学生の求めていることにしっかり対応することができれば真正面からぶつかってきてくれます。最高の瞬間はやはり卒業式ですね。毎年在学中の思い出がたくさん蘇ってきて感涙ものです。

3

Q 私の職場遍歴

A 卒後数年間、診療放射線技師として総合病院に勤務しました。ここでは優しくて頼りがいのある先輩方に囲まれて、診療放射線技師の基礎をたくさん身に付けることができました。今ではほとんど目にすることもなくなりましたが、初期の頃はスクリーンフィルムを用いた撮影でしたので撮影条件や照射条件はみっちり頭に叩き込まれました。フィルムを現像するための暗室のおいも今はもう懐かしい記憶です。その後、結婚を機に当直や宿直がないクリニックに転職しました。ここでは主にマンモグラフィ検査に従事していました。その後、出産・子育てをきっかけに勤務時間の短い大学の非常勤嘱託助手になりました。その後、非常勤から常勤となり大学教員として勤務しています。自分のやりたいことを考慮しつつ、その時の仕事と家庭のバランスを見ながら臨機応変に仕事を選択してきたという感じです。